緊急レポート

地域に根ざしたコミュニティスペースができた

特定非営利活動法人JEN石巻事務所
コミュニティ支援部

伊藤　拓

JEN（ジェン）は、災害、紛争後の緊急支援を専門とする認定NPO法人です。旧ユーゴスラビア紛争を契機に組織され、その後アフガニスタン、スーダン、ハイチなどで活動、国内では、中越大震災に出動し、震災後緊急支援から、村おこしまで六年間にわたり、地域復興の支援をさせていただきました。

東日本大震災においては、三月一三日に出動して以来、宮城県石巻市を拠点に支援活動を実施しています。支援物資配布、避難所運営などの緊急支援に始まり、現在は、緊急復興支援として、ボランティア派遣、仮設住宅支援、産業復興支援、地域コミュニティ支援の四つの柱で活動しています。

炊き出しから始まった

JENのコミュニティ支援は炊き出しに始まりました。これには、被災者に温かい食事を提供する、という第一義的な目的のほかに、地域の人びとが寄り合う場所の提供、という効果があります。

津波から三週間後の四月七日、沿岸部の住宅地域で塗装業を営む阿部貞夫さんに、炊き出しのための場所を提供していただきました。そこにテントを設営し、以来、七月中旬まで途切れることなく炊き出しを行ないました。

この地域はおよそ二メートル強の津波に襲われました。比較的新しい住宅が多く、混み合う避難所を避け被災をまぬがれた自宅二階で生活を始められた方が多い地域でした。このような自宅避難者が多いのも今回の震災の特徴です。

炊き出しは、JENで募集したボランティアチームによって、「炊き出しメンバー募集」の掲示をしながら行ないました。最初は、温かいご飯を食するだけだった地域のお母さんたちが、一人、二人と「自分でもなにか手伝えることがあれば」と協力を申し出てくださいました。こうして、ボランティアチームのなかに、毎日数人の地元のお母さんたちが参加するようになりました。また、テントのなかに机といすを並べ、落ち着いて食事ができる環境を整えました。避難所での生活と違い、自宅避難者にはお互いに情報交換のできる場所がなかったのです。

コミュニティスペース誕生

その後、テントに隣接している事務所あとを修復しました。畳を敷き、テーブルやいす等の備品をそろえ、小さな「コミュニティスペース」が誕生しました。

かつての地域会館は、より海寄りに位置しているため、ライフラインの回復が遅く、使えない状態でした。

蠅の大量発生など衛生環境の悪化が深刻になりつつあった六月、炊き出しは、「コミュニティスペース」へと移行しました。

一〇〇日以上も続いた毎日の炊き出しは、協力してくださったお母さんたちやボランティアチームとの話し合いの結果、七月二二日をもって一旦終了しました。

炊き出しの支援は終了しましたが、地域住民のための「コミュニティスペース」として継続して運営することになりました。炊き出し最終日、場所を提供してくださった阿部さんに、それまでの四カ月を振り返っていただきました。

「…津波があったけども、そのおかげで、こうして皆さんに出会うことが出来ました。近隣の人たちとも、お互い苦しい状況のなかで助け合って、しゃべるようにもなりました。もちろん津波は決していいことではないんだけども、マイナス面だけではなかったです。考えようっていうのかな…（中略）違う側面から考えたら、あの…幸せ、っていうか…津波に流されて幸せってことはないんだけども…そういうふうな思いですね」。

きっかけを提供

この「コミュニティスペース」は住宅地に設置しています。震災前、近所同士の付き合いはほとんどなかったそうです。ところが、阿部さんがおっしゃるように、震災をきっかけに住民同士の交流や、助け合いの気運が生まれました。しかし、避難や転居した家庭が多く、地域住民同士のつながりを維持していくことは簡単なことではありません。そこで、さまざまなきっかけを提供しています。

現在は、近隣に住む住民の方が書道教室を開いたり、大学生のボランティアが子どもたちの宿題を見てあげたり、散歩中のお年寄りがお茶を飲んでいくような地域の憩いの空間として利用されています。また、認定NPO法人難民支援協会を通じて弁護士を招き、無料法律相談会の開催なども行なっています。

今後、被災地は秋、そして長く厳しい冬へと向かいます。あらたな生活課題も発生するでしょう。今後は、地域の人同士のつながりを組織化し、個別の生活課題を地域の課題として、住民たちが協同で解決していくことのできる仕組みを整えることが必要と考えています。JENはそのためのサポートをさせていただきながら、被災者とともに復興へ向けて一歩一歩あゆんでいきます。

（いとう・たく＝認定NPO法人JEN石巻事務所　コミュニティサポート）